

論 文 要 約

論文題目 豊島与志雄文学における台湾書写—昭和十七年の台湾旅行とのかかわりを
中心に

申請者 呉 若彤

要約内容 (日本語で、3000字程度)

本論文は、豊島与志雄の昭和十七年春の台湾旅行及びその所産をめぐって、豊島を初めとする訪台作家たちが台湾在住の知識人と意見交換した成果、即ち双方の交流に参加した者たちの心象及び思考が、如何に豊島の台湾関連の諸作における台湾書写、そして台湾認識に影響を及ぼしたかを考察する論考である。台湾在住の知識人の心象という点、第二章で取り上げたように、台湾が南進基地として位置づけられる下、中村哲を初めとする昭和十七年を生きる台湾在住の知識人を代表する声、ないし願望、すなわち訪台作家に寄せた期待及び台湾文化の育成の方向性に寄せた希望とそれに対する豊島の回答が主調音となっている。しかしながら、第二章で述べたように、ここでいう台湾在住の知識人の声は、台湾在住の日本人に集中する傾向がある。従来、内地から等閑視されてきた状況を変えて認知度を向上させ、台湾文化及び台湾文芸の育成に対して助言を求める、という二つの方面に台湾側の知識人の願望が集中していると確認できる。日本における台湾に関する認知度の向上には、台湾の真の未知の姿を発信する行為と、旅行を終えて日本に戻ったあとも台湾を論じ続けること、の二つがあろうが、台湾を媒体で論じ続けることだけでも認知度の向上に功を奏したと考えられる。豊島が連続して台湾をめぐって発信する創作行為自体が、既にその第一義を果たしたことは言うまでもないし、「未知の台湾の真の姿」を内地に向けて発信することもそこに含まれる。『台湾芸術』(第三巻第五号、昭和十七年五月)に収録される「豊島与志雄・浜本浩 縦横談」からも窺えるように、豊島が台湾やその文化の育成に関して助言し、文学作品でその実践を試行して台湾文化に存在する問題を解決しようとしたことは、彼が台湾訪問で気付いた問題点について自身の創作を通して解決策及びその実践を模索していたことを示している。

第一章「豊島与志雄初期文学「蠱惑」論——西洋文芸の受容を中心に」では、作家としての原点に立ち戻り、特に人間の内面の葛藤を描写する分身譚である「蠱惑」(『新思潮』、大正三年三月)に着目する。豊島は当時大学三年生であった。一人称の分身譚としてのこの作品には、西洋文学と西洋思想の影が見られる。本章では、そうした西洋の要素が、「蠱惑」の表現とモチーフに及ぼした影響を検討して作品の解釈を行う。本作はポオの「ウィリアム・ウィルソン」の手法を踏まえて分身譚を展開する。その一方、豊島は大学時代薫陶を受けていたメーテルリンクの思想でデカダンな気分を乗り越えたことが実生活に関する記録を対照してからわかる。最後に、作家が実生活が作品におと反映を念頭に入れつつ、この作品における西洋文学・文芸

の要素を撰取する手法の一典型を見極める。

第二章「豊島与志雄の台湾旅行及び旅行記「台湾の姿態」をめぐって」からは台湾旅行及びその所産をめぐって、台湾像を捉える異種の文体、つまり虚構性を持つ文体、及び文学ノートと文学作品の相互関係という設定を念頭に入れつつ、章毎に台湾書写の特徴を分析していく。その文面から見れば台湾旅行の見聞を記録した印象記ではあるが、台湾の豊富な自然、台湾文化の現状に目配りをするほか、特に台湾在住の内地人にもあまり知られてはいない台湾の飲食市場及び地酒に注目し、台湾文化に存在する問題点を指摘した上で、最後に台湾文化の今後の育成に対する期待を寄せる。これらの事柄は前述の台湾総督府鉄道局の『台湾鉄道旅行案内』にも該当する紹介があり、趣旨は大体合致しているから、台湾側が発信する台湾像に沿いつつ台湾を紹介するという意図が潜められるかと推測できる。豊島与志雄は大政翼賛会の指導役として国策協力の立場から出発し、意識的に台湾在住の知識人の要望を台湾像に反映させたことも十分に考えられるものの、従来、認知度の低いほうと思われる台湾に脚光を浴びせ、自分の創作行為を通して、台湾の未知の姿を具体的に描き出して日本で認知度を向上させる同時に、今後の文化育成の方向性も提案して、作品のなかで自分の知見の実践を試行する。一連の台湾関連の作品は台湾在住の知識人の要望に基づいた創作行為であり、また、台湾在住の知識人の要望及び期待を作品化したものであると考えられる。

第三章「豊島与志雄「光を育てる人々」に見る台湾像」では、「台湾の姿態」と同月から連載が開始する少年読物「光を育てる人々」（『少国民文化』、昭和十七年六月～十二月）を俎上にあげ、テキスト分析で少年読者に発信した台湾像の特徴、及び発表の場である『少国民文化』の性質を合わせて作者の創作意図を究明する。豊島は全国共通機関誌という発表の場を借りて同時代を生きる少年の読者に届けた台湾像とは、台湾在来文化の再発見を通して台湾への認知度を向上させることに功を奏した。また、豊島はリベラリストとして、物語の主体となる少年たちの主体性を保護すべく、昭和十八年に同誌の童心主義から錬成主義へと方針転換に合意せず敢えて連載を中止した決断にも裏付けられる。要するに、台湾再発見の娯楽性と、少年の自由精神を尊重する教育性が表裏一体となる台湾像は、豊島が昭和十七年を生きる少年に発信したものである。

第四章と第五章「素材としてのトラベル・ライティング—豊島与志雄「台湾の姿態」が文学作品に応用される場合（一）、（二）」では、第二章で「台湾の姿態」の写実を重視する旅行記としての本質を究明したが、その成果を踏まえ、第四章と第五章では「台湾の姿態」が文学ノートとしてほかの文学作品のなかで運用される様子を考察する。現実の確認及び現実に基づいた問題解決とのことこそが文学ノートと文学作品との設定の目的と考えられる。「光を育てる人々」（『少国民文化』、昭和十七年六月～十二月）のほうでは、「台湾の姿態」（『文芸』、昭和十七年六月）との共通項は台湾の印象及び南進基地としての位置づけに反映されたのに対して、異同点は「淋しい夕方」の解消にたどり着くまでの過程の描写につながる。一方、「光を育てる人々」（『少国民文化』、昭和十七年六月～十二月）の連載中止と共に、実現が見込めなくなった「台湾ボケも治るだらう」との目標は、「秦の憂愁」（『文芸』、昭和十九年十一月）及び「上海の若芽」（『読売報知新聞』、昭和十八年十二月十五日）に登場した本島人の姿に関連していると見受けられる。この主題について「文化台湾の性格もやがて創り出さるるだろう」と「所

謂台湾ぼけなども克服されるだろう」の加筆という二つの目標を二章に分けて考察する。

終章では全体をまとめるものになるが、第二章から第五章から究明してきた豊島台湾像の特徴をあらためて取り上げ、異種の文体に捉えられる台湾書写の特徴及びその表現意図を、台湾在住の知識人の声、及び豊島を初めとする訪台作家と現地人が台湾現地で交流を交わした言葉を対照しつつ考察する。「蠱惑」における西洋文学・西洋文芸の要素を活用して心象を表現する手法から、豊島文学における人間の内面という抽象的な心象を捉える典型に着目する。その上で、豊島が台湾訪問に関する知見を直に確認できる一次資料「台湾芸術 豊島与志雄 浜本浩縦横談」(第三巻第五号、昭和十七年五月)、及び第二章で触れた台湾現地で発行された新聞及び文芸時評に掲載された台湾在住の知識人の言論をその手がかりとして裏付ける。最後に、台湾在住の知識人が台湾文化に対する期待および訪台作家への期待が、豊島の台湾書写及び台湾認識の成立を考える。豊島与志雄は大政翼賛会の指導役として国策協力の立場から出発し、意識的に台湾在住の知識人の要望を台湾像に反映させたことも十分に考えられるものの、従来、認知度の低いほうと思われる台湾に脚光を浴びせ、自分の創作行為を通して、台湾の未知の姿を具体的に描き出して日本で認知度を向上させる同時に、今後の文化育成の方向性も提案し、台湾在住の知識人の要望及び期待を作品化したものであると考えられる。